

令和元年9月13日現在

機関番号：32696

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K03060

研究課題名(和文)メキシコ地方都市の「脱伝統的景観」と「旅的」居住観に関する学際的研究

研究課題名(英文)A study on the De-traditional Vistas and the View of Dwelling in Travel in regional Mexican cities.

研究代表者

牧野 冬生(Makino, Fuyuki)

駒沢女子大学・その他部局等・準研究員

研究者番号：50434387

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、メキシコ地方都市の脱伝統的景観は米国に居住するメキシコ系移民の送金や住宅建設といったグローバル都市からのヒト・モノ・カネの一方的な影響下にあるのではなく、移民の故郷の住民や行政との紐帯関係が重要な要素であることを示した。墨米移民と地元住民は共に、メキシコ地方都市における伝統の再生産(セントロ、アシエンダ、都市郊外の住居を中心とする景観変化)に大きな影響を与えている。その基底にある「旅的」居住観は、居住地域を頻繁に移動しながらも故郷との紐帯関係を維持し、独自の社会空間と現実空間を作り上げるメキシコ独自のものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究ではグローバルな移民現象について、送り出し社会であるメキシコ地方都市を「主体」として調査している点が特徴である。世界では、EUからの英国脱退、米国の自国中心主義といったように、グローバルな枠組みを離脱し再構築する動きが見られる。これはグローバル化が抱える問題を特定の地域、大都市を中心として捉えていたために、地方都市の中の議論や不満等を「グローバル都市」に対抗できる言説として構築できなかったことが影響といえる。本研究は、グローバル化に対する一つのアプローチとして地方都市を中心とする見方の提示であり、学術的・社会的意義の高い研究といえる。

研究成果の概要(英文)：In this study, it was revealed that the landscape change in Mexico's regional cities is not under the unilateral influence of people, goods and money from global cities, such as remittance of immigrants and housing construction. The important point is the ties with the hometown. Both immigrants and locals have a major impact on the reproduction of traditions (Centro, Hacienda and Suburbs) in Mexican regional cities. The View of Dwelling in Travel is unique to Mexico, which creates its own social and real spaces while frequently moving through the dwellings.

研究分野：文化人類学

キーワード：墨米移民 脱伝統的景観 想像的伝統 創作的伝統 メキシコ地方都市

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究の背景は以下の通りである。本研究はメキシコ社会人類学高等研究所北東プログラムと数年に渡り共同で実施してきた、メキシコ西部のハロストティトラン市から米国南カリフォルニアとテキサスへ向かうメキシコ系移民の参与観察調査を基に想起された。その後、文科省の科研費(若手(B))を得て、特にメキシコ系移民の視点に焦点を合わせながら“米国に渡った移民が故郷であるメキシコ地方都市に家を建てる意味”と“メキシコ系移民の住居建設による都市拡大現象”の調査を実施した。そこで明らかになったのは、移民の生活段階に応じて様々な移民形態(長期移住型・頻繁な一時帰国による往復型・完全帰国など)を折衷して、個人別・家族毎に展開する移民独自の生活戦略である。また、米国の移民政策や経済状況に様々な形で翻弄されつつも、継続的な海外送金と人の移動によって進行するメキシコ系移民の故郷の都市拡大現象であった。

2. 研究の目的

本研究は、中心と郊外という相異なる方向から、伝統性を逸脱しながら急速に変容しているメキシコ地方都市の「脱伝統的景観」に焦点を合わせるものであった。具体的には、墨米移民の頻繁な一時帰国に伴う都市中心部の観光型開発(特にセントロと言われる歴史地区の観光開発)と、外資系企業誘致に伴う都市郊外の国内移民向け大規模団地開発に着目した。居住空間・社会空間・住居意匠の3つの構築プロセスを、墨米移民、国内移民、地元住民の三者の人類学的参与観察から明らかにし、「脱伝統的景観」の基底にあるメキシコ独自の“旅的”居住観を提示することを目的としていた。

本研究では、主に以下の3つの問題系を明らかにすることを目的としていた。

- (1) 墨米移民の故郷への一時帰国を誘引する地元の戦略的都市開発「想像的伝統」の形成
- (2) 外資企業誘致に伴う大規模郊外団地を国内移民が住まいながら更新する「創作的伝統」の実態
- (3) 「脱伝統的景観」の基底にある“旅的”居住観の理論化と考察

3. 研究の方法

本研究の初年度にあたる平成27年度では、上記3つの研究課題を再整理した。都市開発戦略や大規模団地開発は政府や地方行政と組んだディベロッパーによって実施されることが多い。そのため調査規模が比較的大きいことがわかり、個人のインタビュー調査だけでなく行政や企業へのアプローチが必要であり、フィールドワークの手段に追加する必要があった。

研究の2年目にあたる平成28年度では、前年度に抽出した問題点を踏まえて、各テーマの一層の深化をはかった。特に、「想像的伝統」と「創作的伝統」の理論的面を補完するため、米国で発行されている住宅雑誌なども調査対象とした。

平成29年度は、本来研究計画の最終年度にあたるため、各研究課題を適宜遂行すると共に補完すべき資料の収集に努めていたが、研究期間の1年間延長を行うこととした。これは、米国の政権(トランプ政権)において、メキシコ移民政策が大きく転換されることとなり、グローバルな移民の移動を急激に制限している実情を研究に考慮する必要があったからである。本研究では、こうした新たな政策的事象も踏まえて追加フィールドワークを実施することで、補助事業の目的をより精緻に達成させることを目指した。平成30年度は、査読付きの海外論文ジャーナルへの投稿を行った。

具体的には研究テーマごとに、下記のように研究を進めた。

- (1) 米墨移民の観光一時帰国を誘引する地元住民の戦略的都市開発「想像的伝統」の形成プロセスについて

戦略的都市開発の調査については、メキシコ北部のハリスコ州ハロストティトラン市(以下、ハロス)において綿密なフィールドワークを実施した。ハロスは、ハリスコ州の小規模都市であるが20世紀初めからアメリカ(主にカリフォルニアとテキサス)に多くの移民を送り出してきた移民依存社会の典型的な事例といえる。

初年度は、地元住民の戦略的都市開発の調査を、都市開発の担い手であるハロス市役所都市計画局、政党指導者、実業家、キリスト教役職者、郷土史家に焦点を絞って取り組んだ。そこでは、ハロス市役所都市計画局の開発を踏まえた上で、移民の資金によって広がっている都市周辺の状況を把握することができた。

2-3年目は、初年度のフィールドワークの結果を踏まえ、地元住民と墨米移民の「想像的伝統」の基底となる「ノスタルジア形成プロセス」と「アシエンダの建築意匠」に焦点を絞った。具体的には、地元住民の戦略的な伝統イメージの把握がまず重要であった。これは、地元住民が移民者を引きつけるために戦略的に用いる伝統イメージのことである。また、メキシコ系移民自体が米国で断片的に享受する“メキシカン”や“ヒスパニック・アメリカン”としての言説の把握も重要であった。そのため、第一世代からの故郷の話だけでなく、米国に現存するスペイン様式の住居や、在米コミュニティにおける新聞やメディアなどによる影響についても調査を行った。

4年目に関してはトランプ政権下における移民の減少も確認できたが、観光的一時帰国を誘

引する都市開発自体は計画に沿って推進していることが確認できた。

(2)外資企業誘致に伴う大規模郊外団地を国内移民が住まいながら更新する「創作的伝統」の実態について

創作的伝統の調査においては、ヌエボ・レオン州の州都であるモンテレイの郊外地域に建設された大規模団地を対象とした。初年度は、植民地都市としての都市形成の歴史を踏まえた上で、近年の企業誘致活動と団地建設のプロセスを把握した。そのために、モンテレイの都市計画局から現在進行している団地建設地を紹介してもらい、現地での聞き取り調査を実施した。また、そうした団地に居住する国内移民への参与観察を通して、故郷の住居、企業団地、モンテレイ都市部の3カ所を頻りに移動しながら暮らす独自の生活実態を把握することを試みた。

調査の要点は、特徴的な住居形式を成立させている要因を見つけることにあった。そのために、個人的なプライバシーの問題、コミュニティでの帰属意識と安全保障、居住に関わる親族関係を把握する必要があった。また、増築・改築の際に立ち現れる「伝統性」や「アイデンティティ」の表明としての住居意匠も興味深い点であった。団地設立時には、ほとんど同様の外観が、増築と改築に沿って独自のファサードを形成していく様子を見ることができた。こうした視覚的調査をインタビューと同時並行で行なった。こうした手法によって、「創作的伝統」の実態の把握を試みた。

2-3年目は、「創作的伝統」を可能とする経済的・社会的背景について、具体的な住居配置、増築と改築の頻度、建設方法、住居分布、意匠から個別調査を実施した。これにより郊外から変容する地方都市の実態を捉えることを目指した。

4年目は、トランプ政権による移民政策の転換を意識しながらの調査となったが、大規模郊外団地は国内移民に依存しているため個別の増築改築については大きな変化は見られなかった。

3)「脱伝統的景観」の基底にある“旅的”居住観の理論化と考察について

墨米移民は、頻りに且つ短期のトランスナショナルな移動を実践しながら故郷の送り出し社会において地理的な都市拡大を担う重要なアクターである。一方で、移民や都市に関わる研究は、“グローバル・シティ”である受け入れ社会(米国)が議論の主舞台であり、送り出し社会は受け入れ社会による収奪・領有・不均衡といった固定された文脈で議論され、周縁化されてきた。

こうした既存の言説に対して、初年度は上記のフィールドワークから理論的な再解釈を試みた。それは、送り出し社会の地理的な拡大と、現在進行している再解釈された伝統による地方都市景観の変容「脱伝統的景観」を、墨米移民に加えて地元住民と国内移民の3者の視点から捉え直すことである。

2年目以降は、故郷での定期的な礼拝と宗教行事(聖母マリアの被昇天祭:Asunción de la Virgen等)を軸とした移動生活を容認する社会的背景を分析した。また“旅的”居住観を、歴史的視点と前年度の調査結果から再考し理論化を試みた。

墨米移民、外資企業誘致に伴う国内移民、地元住民の3者を主体とする地方都市の「脱伝統的景観」という現象は、マクロ的視点においては雇用を海外資本に依存するメキシコ経済政策に起因する。重要な点は、この両方の雇用の前提となるのは、頻りにで継続的な移動を容認する生活形態である。ここでは、この日常的な“旅的”居住観を、植民地時代のランチョ(アシエンダ)とセントロ(宗教施設)を往復しながら暮らす伝統的生活の延長線上にあるものとして捉えた。

4. 研究成果

研究成果は以下の通りである。

(1) 米墨移民の観光一時帰国を誘引する地元住民の戦略的都市開発「想像的伝統」の形成プロセスについて

特に、都市計画局、実業家、の郷土史家の聞き取りが極めて重要であった。ハロスにおける綿密なフィールドワークにより、「想像的伝統」を生み出す開発戦略の萌芽的過程(移民者を惹きつける戦略に至る都市計画局の政策や歴史的過程)実施成果としての都市変容との結びつきを把握できた。

ハロスでは、2大政党による都市改造の歴史も重要であった。都市改造によって、ハロスから移民をしていった人々にとってより魅力的な都市開発が遂行された。また、1990年後半のハロス全史の出版、郷土史家の住居改築、メキシコの伝統建築運動に関するメキシコ国立歴史研究所の助言など、ハロスにおける個別的な伝統回帰現象がハロス地元住民の都市開発戦略と関係している実態も確認できた。

(2)外資企業誘致に伴う大規模郊外団地を国内移民が住まいながら更新する「創作的伝統」の実態について

創作的伝統の舞台となる団地形成においては、まず誘致された外資企業による雇用者への雇用安定化システムが極めて重要であることが分かった。都市郊外に誘致された外資企業は、税制優遇と土地貸借の便宜と引き替えに、全職員に対して社会保障(年金、医療サービス、住宅

ローン契約)を準備する必要がある。この雇用安定システムは、大規模な郊外団地を形成して国内移民を誘発し、従業員に長期定住を保証することに繋がっている。また、企業の雇用安定と定住によって、“ローンを組んで住居を建てる”、“建て売り住居を買う”という、今までのメキシコの小・中規模会社の雇用者ではほとんど浸透してこなかった新たな住居購入のスタイルが確立された。それによって無味簡素な外観の大規模団地は、ライフステージの変化に伴って大きく更新されることになる。

(3) 「脱伝統的景観」の基底にある“旅的”居住観の理論化と考察について

近年の大幅な技術革新を背景とした、新しい形のヒト・モノ・カネの頻繁な移動(電子決済や電子マネーを含む)は、国境を超えた移民同士にバーチャルな社会空間(ソーシャル・ネットワーク・サービスなど)の成立を生み出した。本研究ではこうした仮想世界的一方で、バーチャルに還元されない可視的な地理的空間と社会構造の変化を「景観」を軸に見てきたことに特徴がある。人々が生活するのは具体的な実体を伴う場所であり、グローバル都市に集合したヒト・モノ・カネは、その後メキシコ地方都市の生活の場へ還流することで、ローカルな現実空間を大きく変化させている。

また、地方都市を主体として記述するために、地方都市を語るモデルとして「脱伝統的景観」に着目し、その基底にある“旅的”居住観の把握を行った。それは、グローバル都市と送り出し社会の間を繋ぐ人々の頻繁で継続的な移動によって立ち現れるものであった。つまり移民が社会的・経済的な制約を受けつつも、伝統性を独自の戦略で用いながら生活空間を更新している実態の参与観察調査によって把握可能となる。

「脱伝統的景観」は、都市中心部とアシエンダ地域、そして都市中心部とアシエンダの中間に位置する都市郊外で異なる文脈を持つ。都市中心部とアシエンダにおいては、伝統的メキシコ観を再生する想像的な側面(想像的伝統)があり、開発が進む都市郊外においては住宅を住まいながら更新していく創作的な側面(創作的伝統)が見られる。戦略的景観改善としてたち現れる「脱伝統的景観」として、まずハロスを事例に都市景観の変化の流れをまとめておく。

- 1) 1980 年後半頃から、移民が海外送金によって郊外に新しく住宅を建築する事例が増加する。郊外に建てられる移民の住宅のデザインは中産階級型やイメージ先行型が多くを占める。
- 2) 1990 年代から盛んになった地方都市の歴史研究から、ハロスの過去を再評価する郷土史が地元も有力者によって出版される。
- 3) 1994 年にルスティコのデザイン要素を用いてリニューアルされた郷土史家の住宅が都市中心部に完成し、可視的な形でハロスの伝統的デザインの重要性が提示された。
- 4) 1990 年代後半、経済的に成功した移民がセントロの古い家や農場を購入して改修を開始する。一方で、ハロスの一般市民はこうした都市中心部や農村の伝統的なスタイルを再評価する流れにはなっていなかった。
- 5) 2000 年代に入り、グローバル化が加速し、米国での雇用が改善する。格安航空機の増加や交通機関の整備によって頻繁な一時帰省を伴う新しい移民スタイルが確立し、移民の海外送金による故郷への住居建設が増加する。郊外に建てられる住宅は、中産階級型やイメージ先行型と共に、伝統性を強調するルスティコ型が増え始める。
- 6) 2006 年以降、ハロスの移民向けの観光開発プロジェクトでセントロの数件の古い家の外壁を塗り直すプロジェクトが進行する。
- 7) 2010 年代から地元有力者、文化人が仕掛けていた伝統的スタイルを評価するリノベーションが町に大規模に進展し、ハロスの一般市民にもノスタルジックなデザイン要素が浸透する。

現在ハロス市行政は、市内に残る歴史的建造物の保存を進めている。農場の古い家で使われていた家具・扉・壁木材の再利用など、伝統性の再評価はハロスの各地で見られる。2010 年以降、伝統を再解釈する「ルスティコ・スタイル」は移民だけではなく地元住民を含む都市全体に引き継がれ、多くの住居で取り入れられている。

グローバル都市は、地方都市からの移民を、サービス業を中心とした新たな経済基盤の実践者(またはその実践者を底辺で支える二次的サービス業者)として取り込んだ。一方で、地方都市ではグローバル都市に移動した移民を再度地元社会へ取り込む。この取り組みが、メキシコ地方都市の景観変化という形で顕著に現れている。

生活の拠点を米国に移した移民は、故郷への郷愁を伴って地元への観光を行う。特に 8 月のフェスティバルと 2 月のカーニバルの時には、共有化されたメキシコ観が再現された都市中心部を訪れる。また、恒久的な帰国(return migration)や頻繁な故郷への帰国(return visit)の際には、都市郊外の住宅に「ルスティコ・スタイル」が採用される。この「ルスティコ」に代表されるデザイン要素は、その文化面(ノスタルジックなメキシコ観)を郷土史家や有力者といった地元社会の知識層が支え、移民を利用しながら経済的な便益を地元社会へ還元しようとする戦略性がある。一方、移民は故郷でのルスティコ風の住居建設を通して地元社会との紐帯関係を再構築して、移民先での成功者としての位置づけをかつての伝統的社会の為政者の名前に重ねることが可能となる。

本研究において、メキシコ地方都市（ハロス）の景観変化は、移民の送金や住宅建設といったグローバル都市からのヒト・モノ・カネの一方的な影響下にあるのではなく、故郷との往還関係の中から生まれてきたものであることを示すことができた。墨米移民と地元住民は、メキシコ地方都市における伝統の再生産（中心部、アシエンダ、都市郊外）に大きな影響を与えている。“旅的”居住観は、住居を頻繁に移動しながら独自の社会空間と現実空間を作り上げるメキシコ独自のものである。

本研究の成果として、平成 28 年 3 月に開催された米国応用人類学会 SfAA2016(Society for Applied Anthropology)にて口頭発表を行った。また、平成 28 年 5 月開催のラテンアメリカ研究学会 LASA2016(Latin America Studies Association)にて口頭発表を実施し、研究内容について深化させることができた。また、平成 29 年 3 月に開催された米国応用人類学会 SfAA2017(Society for Applied Anthropology)では、これまでの発表で確認できた問題点を踏まえて、再度研究内容を公表した。

本研究内容をまとめたものを、平成 30 年度に海外査読付きジャーナル(Hispanic Journal of Behavioral Sciences)に研究論文として投稿し、平成 31 年 4 月に出版された。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

Fuyuki Makino & Shinji Hirai, (2019) “ The Role of Mexican Immigrants in the United States on the Imagined and Invented Traditions in Mexico ’s Regional Cities ”, Hispanic Journal of Behavioral Sciences, 41(2), pp.197-213, 査読有.
DOI: 10.1177/0739986319843510.

牧野冬生・平井伸治, (2017) “ 地方都市を語るモデルとしての脱伝統的景観 メキシコ地方都市にみる想像的伝統と創作的伝統 ”, アジア太平洋討究, No.28, pp.225-243, 査読無.
https://waseda.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=36599&item_no=1&attribute_id=162&file_no=1

牧野冬生, (2015) “ メキシコシティの水環境改善への取り組みと住宅地形成 ”, アジア太平洋討究, No.26, pp.237-248, 査読無.
https://waseda.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=25576&file_id=162&file_no=1

〔学会発表〕(計 3 件)

Fuyuki Makino, (2017) “ The Changing Vistas of Provincial Mexican Cities: Creative Imagination and Ethnic Tradition ”, Society for Applied Anthropology Annual Meeting 2017, Santa Fe, New Mexico, U.S.A.

Fuyuki Makino & Shinji Hirai, (2016) “ Creative Conventions and Imaginative Traditions: The Changing Appearance of Provincial Mexican Cities ”, Latin American Studies Association: LASA2016, New York, NY, U.S.A.

Fuyuki Makino, (2016) “ De-traditionalized Vistas of Provincial Mexican Cities2016 ”, Society for Applied Anthropology Annual Meeting 2016, Vancouver, BC, Canada.

6 . 研究組織

(1)研究協力者

研究協力者氏名：平井 伸治

ローマ字氏名：HIRAI, Shinji

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。